

73 卷からなる「旧事本紀大成経」の第 70 卷目に、今日に伝えられています推古 12 年（西暦 604 年）に制定された「憲法本紀十七條五憲法」があります。また第 33 卷帝皇本紀に推古 6 年 10 月 10 日に越国から天皇へ 17 に枝分かれした角を持つ白鹿が一頭献上されたとあります。

### 〔白鹿文様の解釈〕

聖徳太子は推古天皇に献上された白鹿の角にあった 17 個の文様から「琴・斗・月・台・鏡・竹・冠・契・龍・花・日・車・地・天・水・籠・鼎」の文字を読み取り、文字一つ一つから世の中の普遍的な法を解釈し、天の示した法として 17 の<sup>ことわり</sup>理を汲み取り、人はかくあるべきという「人の道」を説かれました。16 の文字は和（琴）を中心に相対する二つの互いに関連をもつ文字として構成され、その中心にある和を統一理論としております。「天命を成すための天地自然の流れ、方法とは何か。実践行動の規範、個々の存在意義とは何か。」を「人の道」の理念として総論 17 條に説き、この総論を基に民には「通網憲法」、政治を行う物には「政家憲法」、神職にあるもの神道を学ぶ者には「神職憲法」、儒教を学ぶ者には「儒士憲法」、僧侶と仏教を学ぶ者には「釈氏憲法」という 17 の條章からなる五憲法を編纂されました。五憲法それぞれの各條章は総論に基づき一条ごとに一貫性があり、まさに驚くべき叡智がそこに見受けられます。

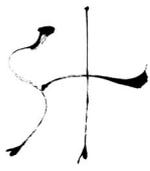
この原点が白鹿文様の解釈にあります。

#### 1、 琴



琴の音色を聞くと心が和み、感情を鎮めてくれることから、感情の和らぎの貴さと、感情の食い違いの無いことを根本とした。つまり、和とは理屈を越えた人間の情の世界にあり、情の結び付である。情が通わずして和はありえない。情理を含まない道理は成り立たず、情理のための道理である。天命を歩む調和の姿を道といい、異なりを認めながら一つを自覚する働き、相矛盾したもの、相対的なものが離れてはありえない全一の道を和道という。生活の営みから、大事は政治を行うに至るまで、助け合い、争いをしない人間の感情の調和・協調の道、「<sup>やわらぎ</sup>和の道」を説く。

## 2. 斗



北斗七星が天の法則に従って巡ることから、人意ではなく、天意に従うことを第一とする。この順<sup>したが</sup>うということから「順<sup>じゆん</sup>ずる道」を説く。和道（道理の裏付けのある情理の一致）に従って実現する道を順道といい、和に従うのが人の役目で、和は順道無くして果たせない。つきない泉から命の水をくみ、清く明るい私利私欲の無い気持ちで政事<sup>まつりごと</sup>にあたる。

## 3. 月



月は太陽の光を受けて満ち欠けする。この満ち欠けは進むことと、退くこと、つまり、進退をはっきりして、己の分限をわきまえ、節度を守ることを意味し、これが礼であり、人としての基となる。君臣にうやまいの心と謙讓の心があれば秩序が乱れず、国民にうやまいと謙讓の心があれば国家は自然と治まる。規範は天にあり宇宙の原理を意味する。それに従って生きることが礼である。このことから「禮<sup>うやまい</sup>の道」を説く。

## 4. 臺



天の三公（日、月、星）の私心の入る余地の無い運行をささえる役目を台という。国の政治、民の繁栄、それは私心なき台のささえによるもの。天の政事をささえる大事な役職を大道の基本として「政<sup>まつりごと</sup>の道」を説く。政道とは王道の根本である。天皇が尊いのは積慶（生活の安寧）、重暉（生きがいのある人間社会の確立）、養正（破邪顕正）という天皇道（建国の理念）を歩まれる故、それを継承実行する政道が一片の私心無く行なわれてはじめて天皇道が歩める。それを行なうのが三公という台（太政大臣、左大臣、右大臣）の役目。人として生きる台とは敬神、尊皇、愛国である。

## 5. 鏡



鏡はすべてを映し、また照らす。すべてを客観的にありのままに映し出し、明らかにするこが智<sup>さと</sup>り。また、全てのものを正しく明らかにする

ころが智の基本。あらゆるものを照らすことが智の働き。このことから政道に私無く、客観的判断で物事を正しく識別し、民を生かし、啓蒙する道の要として「<sup>さと</sup>智の道」を説く。曇りなき鏡であること、心の働きが全てに行き届き、事の道理を見抜く智慧を磨き続けることが大切。

## 6. 竹



竹は長草（民草の長）といい、草は国民（民草）の意、長草は人の上に立つ人を意味する。公務を行うということは、節度を持ち、竹の空洞のように私心無く、わだかまりや先入観を持たず、広く平らな心で物事に挑み、重みに耐える強靱さ、それをはねのける柔軟性をもって

行うことが肝要。公務は王道を行う大きな務めとして公務に携わる者の「<sup>かん</sup>官の道」を説く。

## 7. <sup>かんむり</sup>冠



冠は位や階級を表わします。天の意に即した秩序ある公務の執行と、位階に相応した冠にふさわしい行動とその重みに耐えられる器をわが身に戴いて職務を遂行する「<sup>かんむり</sup>位の道」と説く。徳、仁、礼、信、義、智にそれぞれ大小をつけて冠位 12 階を制定。社会的秩序の自覚とは上

下本末の自覚、時処位相応の行為。秩序は機能の差の上に成り立ち、各々が違う機能を分担することで全体が果たせ、異なるが故に事が成るということになる。それぞれの位階に相応した働きをするからこそ、皇道として政が行なわれ、安泰となる。

## 8. <sup>ちざり</sup>契



<sup>ちざり</sup>契とは宇宙を貫く法則に従って生きることへの約束を意味する。契を表すのが文字。文字によって人の道理を示し、道理は「<sup>まこと</sup>信の道」によって成り立つ。信は、一点の曇りなき心境で真理、真事、真実、真心を意味し、正しさの本となる。道には道理があるからこそ道と言える。

信が無くて道とは言えない。仁義礼智に、はたらき（用）としての信（直き心、偽り無き心）を加えて初めて一つの心になる。一心に信に努めることだ。この信を得心して徳を得ることができる。

信を以って 礼を身に付け、徳を美しくし、  
義(ことわり)、正しさを身に付け、徳を明らかにし  
智、学びを身に付け、徳に明らかなさを増し  
仁を行い

これによって、欠けることの無い真実の徳を身につけることができる。後は淡々と己を忘れてその徳を日常行なうのみである。「<sup>まこと</sup>信の道」はすべての道を束ねる。

(沖莫に帰して之を尽くすのみ、禅の百尺竿頭進一步の意に同じ)

## 9. 龍



龍は清らかな徳を持ち、大きな体を持ちながら小さくも成り、大いなるものも小さなものも大切にする。龍にはめぐみ、慈しみ、和らぎ、穏やかという意味があり、生活の五品目（衣食木材器）の潤滑な流通による国民生活の安定をさせる流れの意味も持つ。大小変幻自在と高き所から低き所にも流れることから「<sup>ゆずり</sup>謙の道」を説く。「<sup>ゆずり</sup>謙の道」（へりくだる）は「礼の道」（相手を尊ぶ）のもとになる。

相手に対し対立感情を持つのではなく、自分に非が無いかよく反省することである。自分の意見が正しくとも、衆人が一致した意見であればひとまずこれを受け入れ、高慢さを謹み、人と共に語り合うことを大切にする。

## 10. 花



花が美しく咲くこと、散ることは自然の摂理。賞罰を行う上で、私情無く自然の摂理にあわせて行うことが公に仕える「<sup>こと</sup>事の道」。「<sup>まつり</sup>政の道」には具体的な行いである「事の道」が必要である。

公に仕えるということは、天皇が行なわんとする理想の政（直…縦糸としての天命、目標）を具体的に行なうこと（曲…横糸としての達成手段、方法）である。大臣達に私心があれば天皇の理想の政<sup>まつりごと</sup>が歪んでしまう。

## 11. 日



日は天の中心であり、天の三徳を備えている。あらゆるものに対する慈しみである温徳、すべての物事の本質を見極め明らかにする明德、根幹に慈しみをたたえ、物事を明察した上で事を行う勇徳。「主」<sup>あるじ</sup>（国を治めるもの）は日の徳をもち、仕える者はそれを尊ぶ。「主の道」は天に従う国の元<sup>もと</sup>である。

## 12. 車



乗る器である車は、両輪あってその価値がある。公務を行う「司<sup>つかさ</sup>の道」（取り仕切る道）は両輪を欠くようなおろそかなことはしてはならない。「司の道」は「官の道」（公務員の在り方）のはたらきによって決まる。

## 13. 地



地は天にたいして嫉妬することなく、常に足下に位置し、ひたすら地の働きをする。己の嫉妬を無くし、物事を成すことが「徳<sup>とく</sup>の道」にかなうことである。道の姿が徳となる。

## 14. 天



天とは宇宙のことである。どのような時でも、まったく私情が無い。これを「公<sup>おおやけ</sup>の道」と説く。「公の道」は国を治める政<sup>まつりごと</sup>のすべてである。

## 15. 水



水は夏に融け、冬に凍り、すべての形に順応し、方円の器に従うが如く変化の妙味を持っている。自然の流れ、時所位に即して形を成す。

民を使う基は時期をはかっていること。これを「時の道」と説く。「時の道」は諸々の道に対応する。

## 16. 籠かご



品々もろもろのことは、編目を通すことで大小に分けることができる。これを「品の道」と説き、諸々のことに対応する機もととする。

## 17. 鼎かなえ



鼎はかまどの器である。支える三本の足は儒教、仏教、神道の三つの法みちにある。儒教はこの世の筋道である理ことわりをたて、余った功德は現世と死後に及び、仏教は死んだ後を導き、余った功德を現世に導く、神道は現世と死後を同じように救い、どちらか一つにかたよることは無い。ここに「法の道のり」を説く。政道を立てるのに必要なのは三法に他ならない。